

野家啓一さん
が選ぶ

平成 ベスト本



蘇った私小説の毒に戦慄

①車谷長吉著『鹽壺の匙』(新潮社、1992年刊) 死滅したかと思われていた「私小説」を平成の世に蘇らせた作品集。ペン先をおのれの臍に突き立て、ほとぼるる血糊で書き上げた「生前の遺稿」

は、その毒で都会人の心胆を戦慄せしめずにはおかない。

②山本義隆著『磁力と重力の発見』全3巻(みすず書房、03年刊) 魔術から科学への歴史的転換期を「磁力」という一本の補助線を引くことで見事に浮き彫りにした雄渾な科学史。近代物理学の形成過程を遠隔力の発見という斬新な視角から描き直す。

③鷺田清一著『「聴く」との力 臨床哲学試論』(TBSブリタニカ、99年刊) 哲学を看護や介護など困難な社会の現場へと連れ出し、「臨床哲学」という新たな領域を

切り開いた力作。哲学とはソクラテス以来「魂のケア」の営みであったことを思い起こさせてくれる。

④木村敏著『偶然性の精神病理』(岩波書店、94年刊) 精神医学と哲学とを架橋し、エビデンスに拝跪する現代医学のあり方に一石を投じた問題作。自己と世界が出会う接点、すなわち自己の居場所は「あいだ」にあるというテーゼを掲げて生命的現実の根源に迫る。

⑤田川建三訳著『新約聖書訳と註』全7巻(作品社、07年〜17年刊) 新約聖書で神の言葉を記した信仰の書ではなく、「人間が書いた文章」すなわち歴史資料として解説した画期的新訳。綿密な注釈はイエスという男を一人の類まれな人間として魅らせる。

(東北大学名誉教授・哲学者)

◇朝日新聞では昨年、識者の方々に平成時代の本のベスト5選出アンケートを実施しました。いただいたコメントを本欄で紹介しします。集計結果は「平成の30冊」として、好書好日 (<https://book.asahi.com/>)で紹介しています。